

忘れてはいけないこと

(原文)

星川 葉月 (13 歳)

京都府

洛西進学教室

自分の好きなことや興味のあることに没頭するのはとても素晴らしいし偉大なことだと思う。しかし私たちは今、そのようなことに夢中になり過ぎるあまり、自分のことしか見えず、他者の好きなことや興味のあることに対して無関心すぎるのではないだろうか。

現在、世界には「自然保護団体」や「絶滅危惧種保全研究会」といった団体があるのを知っているだろうか。これらの団体は、世界でも増加傾向にある絶滅危惧種を守るために立ち上げられた団体だ。例えば農作物を栽培する際、私たちは雑草が生えるのや害虫による被害から農作物を守るために、当たり前のように除草剤や農薬をまく。また、人間の身勝手であまりにも残酷な行いでつばめなどの野性で生きる動物たちが巣作りなどを出来なくなっているのではないだろうか。私はこれらのことから、人間は自然の一部でありながら、共存できない、持続不可能な世界を創り出しているのではないかと考える。私が卒園した幼稚園は普通の幼稚園とは少し違う点があった。それは、園庭の中に大きな木があり、多種多様な動物たちがいた点だ。園児たちは春になるとびわを収穫し、秋にはキウイ、ザクロ、さらにはぎんなん、そして冬にはみかんや金柑を収穫して食べた。みかんなどは無農薬なため、木に三〜四つしか実がならない年もあり、クラスメイトと分けながら食べたことは、今でも鮮明に覚えている。時には、園庭に野性のヘビが出たこともあった。くじゃくはオスもメスもいたので、オスが羽を広げるのも何回も見たことがある。私は、このように自然とふれ合うことで当たり前のようにおいしい、形の良い野菜や果物を食べることでできるありがたさを感じることができた。また、たとえ形や見た目が悪くても、農薬を使っていなくてもおいしいものを食べられる、ということを学んだ。そして、「思い出」という大きな財産を得ることができた。

私たち人間は、自分達の利益を追求するあまり、自分たちのことしか考えていないのではないだろうか。もし住み家を攻撃されたら？人間でさえ身体への悪影響を心配される農薬などをふりまかれたら？生物たちはどうになってしまうのだろうか。人間の身勝手な行動で住み家を無くし、さらには子孫の繁栄すらできず数が減少し続ける生物がこの世にはたくさんいるのだ。人間は雑食動物でありながら、自らの手で将来や未来を破壊し、食物を減らしているのではないかと私は思う。だからこそ私は、そうならないために絶滅危惧種の保護をする団体などに目を向けたいと考える。仮に自分には無関係で興味のないジャンルだとしてもだ。

確かに自分の軸を持ち行動することは大切だ。しかし、自分の軸を持ち、行動するのと自分のことだけを考えて行動するのは少し違うのではないかと私は思う。自分の信念に基づきながらも、その行動が本当に正しいのか、人を傷付けないのか、を行動を起こす前に立ち止まって考えるべきなのではないかと考える。そうすることで相手を思いやり、相手について知る機会が増え、相手に関心を持つことにも繋がるのではないだろうか。互いのことを慮り、尊重し合うことで物事も良い方向に向かうと考える。私は、そのようなことができる人になりたいし、少しでも多くの人 そうなってくれることを願う。